

一枚のチラシから

今朝、朝刊と共に届いた一枚のチラシが目にとまりました。某学習塾の生徒募集のチラシです。私はこれを見て、寂しさ、空しさを感じました。

チラシによると、その塾の授業、自習、講習を受けるとポイントがつき、それによって景品や旅行がプレゼントされるとのこと。確かに、世の中にはポイント制があふれています。塾もとうとうそうなってしまうのか……と残念な気もちです。

私は塾反対論者ではありません。むしろ、授業をもっていた時の私は、塾に大いに刺激を受けていました。立場は違っても、共に教育に携わる者として、塾の動向に興味をもっていました。学校で塾の宿題に取り組む生徒をみつけると、どんな問題を生徒たちに取り組ませているのかと興味津々でした。「塾の先生の教え方がわかりやすい」と評価する生徒がいると、それはどんな教え方なのかしつこく尋ねていました。私の作成した過去問のコピーを生徒たちがもっているときには、ライバル意識を強くし、既成の問題集を参考にすることを一切やめました。授業でやったことしか出題しないオリジナル問題を毎回作りました。

このように私は、塾のやり方から学んだり、それまでの自分のやり方を改めたりしました。私が教師として成長できたのは、このような別の立場で教育に携わる学習塾という存在があったことも関係していると思います。

実は、私も塾には通っていました。ただし、「予備校」という塾です。学校の授業と違い、予備校では「ここに気をつけて、こういうやり方で、このように解いていくと答えが導き出せる」と、実践的な問題を教材にして学びました。まさに、教えることが目に見える成績と直結するのが予備校です。目指すものや成果が数字として見えるので、モチベーションが上がりやすいと言えますね。

生徒にとっては、学校の教員も塾の講師も「先生」です。授業は「業を授ける」ものであり、「ものの見方や考え方」と「問題の解き方」の違いはあっても、どちらも彼らに力をつけさせることをねらいとしています。学校も塾もそれを忘れてはならないと思います。

もちろん、チラシを配布した塾も、生徒に力をつけるために精一杯教育に携わっているとわかっています。いろいろな塾がある中で、全てがこういう経営をしているわけではないともわかっていきます。ただ、教育が有する、ピュアな子どもたちを導く責任を考えたときに、商業色があまりにも色濃くでいた現実に残念な気持ちが生まれたのです。

(十一月十日記)